

実践報告 (Report)

自然観を視点とした〈言語/造形〉によるアート・メディエーション

— アフリカ (タンザニア) における生命 (いのち) のイメージ —

Art mediation by <Language / Art> from the view point of nature:
“Life of Image in Africa (Tanzania)”

磯部錦司¹・イミック アレクサンダー²・笹瀬綾香³

ISOBE Kinji¹, Alexander IMG², SASASE Ayaka³

摘 要

本実践は、〈自然/生命〉を視点に、言語と造形によるメディエーションから「芸術の6層」を検証することを目的とした一連の研究のための実践事例である。自然観を核となる「知」ととらえ、「芸術による教育」の構築を目的にタンザニアと日本の小学校において「生命 (いのち) のイメージ」を主題に、ワークショップと鑑賞活動を展開した。前報告では、タンザニアでのワークショップの内容と、アフリカの子どもたちが描いた作品を用い、日本で行った鑑賞活動の実践について報告した。本稿では、アフリカの子どもたちの表現をとおした鑑賞活動によって生成された日本の子どもたちの「生命 (いのち)」の解釈について報告する

キーワード：生命，自然，アート，言語，メディエーション

Key words : life, nature, art, language, mediation

1. はじめに

1-1. 実践の背景と目的

本実践は、「芸術の6層」(磯部 2020)の実相と知の構造を、言語と造形から検証することを目的とした一連の研究における実践事例である。「芸術の6層」とは、芸術論における芸術の働きと現代日本の生命論を基盤に、芸術を、A層～F層の6層から示したものである¹⁾。先の研究では、まず、芸術において生成される意味を、「生命 (いのち) のイメージ」を課題に、日本、オセアニア、アフリカ、アジア、ヨーロッパで収集した記録から検討し、6層の活動内容及び生活文化との関係において示した (2015～2018)。

本実践では、日本とアフリカでの実践を基に、作品及び言語化された記録を用い、諸言語と造形に生まれる齟齬を表面化させ、融合的、統合的な解釈 (メデュエーション) から芸術において生成される意味をより明らかにしていく。前報告ではその実践事例を示し²⁾、本稿では、そこで検討された子どもたちの「生命 (いのち) のイメージ」の解釈について報告する。

1-2. アート・メデュエーションについて

メデュエーションは、言語、医療、司法等の領域において活用され、双方に生まれる意味の解釈の齟齬を表面化し、融合的、統合的、相互的に意味づけていく手法である。「アート・

メデュエーション」とは、その考えを芸術の意味解釈に援用した本研究における造語である。本実践では、同テーマにおいてタンザニアの子どもたちが表現した作品を用い、その内容を日本の子どもたちが鑑賞し、言語化するプロセスにおいて深まる「生命のイメージ」について報告する。これまで収集した記録については現地語及び既に翻訳された日本語において行い、本稿では、日本とアフリカでの実践を対象に、アフリカでの言語間はイミック、笹瀬が、造形及びプロセスの関係は磯部が分担し、対象者が形成する意味の解釈を行う。

1-3. 主題「生命 (いのち) のイメージ」について

本実践の研究目的は、子どもが芸術をとおして形成する自然や生命に対する意味を、造形化と言語化による融合的な質的手法において分析することである。これまでに「生命のイメージ」を課題に、アジア (日本、タイ、韓国)、オセアニア (オーストラリア)、ヨーロッパ (ドイツ、フランス、デンマーク、チェコ) において、表される造形と作者の記述から、形成された意味について分析を行ってきた³⁾。その内容は、(a) 自然の環境や事物そのものを用いた内容、(b) 気持ちや感情とつなげた内容、(c) 関係性や状況を表す内容、(d) 生命力やそれへの共感を表す内容に大きく見られ、それらの内容は複雑に絡み合っていた。さらに、教育学と心理学の協働による質的・量的な相互分析では、欧州、豪州の表現は、日本の子どもたちに比べ自然界の形や色を多く用いて表現され

¹ 椋山女学園大学教育学部、² 中京大学国際教養学部、³ 清須市立清洲小学校

2022年11月8日受付

ていることに特徴があり、日本の子どもたちの表現にもそれは多いが、抽象的、幾何学的、シンボリックな形態の割合が欧州、豪州に比べ多く見られた⁴⁾。それらは、表現内容の(a)～(d)と関係している。しかし、形成される意味は多岐に渡り、検証のために各国・地域において言語化された表現の意味は必ずしも深層において共通の意味を持たず、言語と造形の融合的な解釈による分析が必要であることが課題として残された。生成される個々の意味は、個人の生活背景や文化、経験に裏付けされたものであり、より統合的、相互的な分析が求められた。

本実践は、アフリカを対象に実施したものである。生活背景や文化の違いに大きな特徴が見られること、日本語の「生命(いのち)」の概念を表す言葉(“Uhai”)が存在するところに本実践の特徴がある。

2. 子どもたちによるアート・メディエーション

2-1. 実践の概要

(1) アフリカにおける実践

①実施校

L小学校⁵⁾(タンザニア, トウリアニ): 小学2年生～7年生(174名), 2020年2月25日, 26日

R小学校⁶⁾(タンザニア, ザンジバル): 小学3年生～5年生(35名), 2020年2月27日

②実践内容

絵画「生命のイメージ」の制作と発表

紙ハガキ大, クレヨン(日本製16色市販)を用い各自が絵画で制作し, 自分の作品の内容を言語化する。日本語をスワヒリ語に翻訳し, 制作の主旨とテーマ, 方法について説明を行った。まず, 「生命(いのち)」(“Uhai”)からどんなことを想像するのか言語で発表した。次に, 紙とクレヨンを配布し, その言葉のイメージを色と形で表現した。制作時間は約20分であった。完成後, 自分の作品について, ワークシートに記述し, その内容を言葉で発表した。

実践は笹瀬, 磯部のTTで行い, 言語化はイミックがワークシートを用い行った。スワヒリ語は笹瀬, 現地教員が担当し, 英語はイミックが担当した。記録は, プロセスの映像と作品, ワークシートにおいて収集を行った。尚, 笹瀬は2月のタンザニアでの実践と, その後の11月の日本での実践の両地において担任教員として携わった。

(2) 日本における実践

①実施校

・S小学校(5年生25名, 2022年9月14日)

②実践内容

- ・絵画「生命のイメージ」の制作(紙ハガキ大, クレヨン(日本製16色市販))
- ・アフリカの子どもたちの作品「生命のイメージ」の鑑賞活動

上記のアフリカの子どもたちが描いた「生命(いのち)のイメージ」の作品と同テーマにおいて自分たちが描いた作品を用い鑑賞し, 言語化において共通点や相違点に着目し, 生命への見方や感じ方を深める。前報告では, K(2年生175名, 2020年11月25日, 27日)での実践についてその展開と内容について示した。2022年, S小学校においても同実践を試み, 本稿では, その鑑賞活動において解釈された「生命のイメージ」の内容について報告する。授業は, 担当教員⁷⁾の協力を得て, 磯部とのTTで行った。自分たちの作品とアフリカの作品を比較しながら鑑賞が行えるよう同テーマでの絵画制作を先に設定し, 次に, 鑑賞活動を行った。鑑賞活動では, アフリカの子どもたちの背景や生活を理解させるために, 笹瀬がタンザニアで担任時に記録した生活, 文化, 環境に関わる映像を構成し活用した。記録は, 発言した内容の記述記録とワークシートにおける記述内容を用いた。

2-2. 〈言語/造形〉による「生命(いのち)のイメージ」の解釈

(1) 分析方法

本実践は, 異文化間において表現された作品の造形からイメージを言語化する場面に着目する。日本の子どもたちがまず自分の「生命(いのち)のイメージ」を造形と言語で表現した後, アフリカの子どもたちが描いた作品について鑑賞活動を行い, そこに形成される「生命(いのち)のイメージ」について, 記述記録から分析を行う。対象とした作品は, K小学校で用いた作品と同じ8作品を用いた。作品の選択は, 最も多く描かれている太陽, 木, 草花を中心にモチーフ及び色使いに特徴が見られる作品を選択した。日本の子どもたちの表現内容については, 2017年に同小学校の2年生, 6年生を対象に分析を行い下記の4群に特徴が見られることを示した⁸⁾。

- 「具体的な自然の事物や風景」
- 「生命に対する気持ちや感情」
- 「状況や関係性」
- 「生命力への共感」

主にその4つの視点を基にしながら, 共通点と相違点を考慮し, アフリカの子どもたちの造形表現から言語化された「生命(いのち)のイメージ」について検討する。記述分析は, 子どもたちが自分の感じ方の根拠としている造形要素を各作品について明らかにし, そこに生まれるイメージについて抽出し, 4群を中心に整理し, 日本の子どもたちの作品に見られるイメージの共通点と相違点からイメージの深まりを示す。

(2) 作品1についての結果と考察(表1)

①子どもたちが根拠としている造形要素

- ・大きく真ん中に描いている。
- ・太陽のまわりの多様な線。輪郭が水色。
- ・多色で描かれた太陽。真ん中が黄色やオレンジで外側は青

表1 作品1についての記述

【作品1：イメージの言語化】

(*A～Y：児童，下線：イメージ，下線：造形要素，下線：全体の感想)

- A：日本の太陽とはちがう感じがして、アフリカはそういう太陽なんだなあと思いました。水色もはいつているから、その発想はおもしろいです。
- B：やさしい感じ(b1)
- C：私は太陽を真ん中に主役みたいに置かず、右上に置いたけれど真ん中に主役みたいに置いてある。太陽を描く色によって気持ちがある。
- D：太陽のりんかくが水色でかかれています。太陽はあつイメージがあるのに水色でかいてあったのでびっくりしました。黄色でかくことでまぶしい感じ(c1)がしました。かがやいている感じ(c2)。
- E：自分のかいた太陽は、赤一色だったけれど、アフリカの人たちは2色や3色の太陽があつておもしろいと思った。太陽のまわりに付いている線のようなものをいっぱいかいていた。
- F：やっぱりオレンジなどでかかれています、水色が入っているものもあつてどうしてそうしたのか気になる。
- G：赤色が入っていない。パワーをもらう。強さが分かる(d1)。同じ色を使わずに、色を分けている。紫や水色など太陽ではあまり使わない色を使っている事が気になった。
- H：別の国の人でも、自分たちと同じ黄色や、オレンジ色でかいている。周りを線でかいている。みんな、自分が感じた太陽の色でかいている。色がしばらくっていない。
- I：まわりをつつみこんでくれるような感じ(c3)がする。
- J：大きくて、ほっとするイメージ(b2)。グラデーションがかつていて2色だけでも色とりどりにみえる。色が少くはっきり黄色でかいてある。
- K：明るそう(b3)，いろいろな色。
- L：笑顔みたいにあかるい(b4)。元気なイメージ(b5)がある。太陽から出す光はむらさきやカラフルな色。
- M：真ん中が黄色でほっとするような感じ(b6)がする。太陽といたら四分円の太陽しかかかないけれど、タンザニアの子は大きく真ん中にかいている。単色ではなくて多色の太陽になっている。黄色にかがやくような(c)やさしくほっとする(c)太陽の効果がある。
- N：太陽は人によって色が違う。輝きがある(c4)。
- O：大きくかかれていますとても元気になれる(b7)。真ん中が黄色なので明るくて、楽しい(b8)。2色使われていて他の色を使っていないのでしっかりと、くっきりしている(c5)。
- P：黄色やオレンジであたたかく明るい気持ち(b9)。
- Q：日本ではオレンジ色や赤が基本として頭に入っていました、外国の人の物をみても、その人それぞれの生命のイメージや太陽に対する思いが違うのではないかなと思いました。アフリカの人々には、太陽がさんさんとふり注いでいる(c6)ことを表すようにしているのではないかなと思いました。
- R：大きく感じる(c7)。太陽の外側は青くなっている。光っているように見える。強さがある(d2)。
- S：1色だけでなく何色も使っている。太陽の明るい赤、オレンジ、黄色だけでなく、感じた色で書いている。
- T：丸く、スパークがある、いろいろな色をつかっている。月みたい スパークは光のひろがり(c8)。
- U：色を濃くかいている。1色だけではなく何色も使っている。
- V：黄色になつていたり、色をたくさん使っている。
- W：あつそう(b10)。ギンギラ(c9) 太陽は、むらさきでも、黄色で光っている。ホッと(b11) ほかほか(b12)。
- X：光っている(c10)ように感じた。太陽のまわりに水色を使つていてなにかの感情をあらわしたいのかなあと感じた。
- Y：明るくて、あたたかいイメージ(b13)。優しく、強く表現されている(b14)。

くなっている。紫や水色など太陽ではあまり使わない色。

- ・光が紫やカラフルな色。
- ・紫も黄色も光っている。濃い色。

②子どもたちのイメージの解釈

- ・太陽がさんさんとふり注いでいるような感じ。大きく感じる。(a)
- ・やさしい感じ、描く色によって気持ちがある。輝くような優しくほっとする太陽。元気なイメージ。とても元気になれる。明るくてあたたかいイメージ。優しく強い感じ。明るくて楽しい。明るそう、笑顔みたいにあかるい感じ。優しくほっとする感じ。(b)

- ・周りを包み込んでくれるような感じ。ギンギラ、まぶしい感じ。輝いている。輝くような光のひろがり。光っているように感じた。(c)

- ・パワーをもらう。強さが分かる。元気になれる。(d)

③作品1についての考察

作品1は、「生命のイメージ」を太陽という表象物をとおして表しているが、太陽は単なる生命の象徴でなく、使われる色や形から、優しさや明るさ、強さ、楽しさといった「感情や気持ち (b1～b14)」、また、まぶしさや輝き、「周りを包み込む」といった「状況や関係性 (c1～c10)」を子どもたちは読み取っている。さらに、「力強さ」や「パワーをも



作品1

らう」「元気になれる」といった「生命力 (d1~d2)」に関わる内容を作品から感じている。使われている多様な色や多様な線の表現に日本とはちがう感じ方を見つけ出している。

(3) 作品2～作品8についての考察

下記、作品1と同様の手順を踏まえ、作品2～作品8について考察を行った。

①作品2について

作品2は、「日本にはないいろいろな花の色」「見た色とはちがう色」「見える色ではなく感じた色」を根拠としながら、枝、幹、葉の色が固有色や視覚的な概念にとらわれずに多様な色で表現されていることに違いを見つけている。さらに、構図から「人ともつながっているような感じ」「みんなつながっている家族みたいなことをしめしてる」「人と人は木と同じようにつながっている」等、「つながり (c)」という概念で、人との関係を統合的、総合的にとらえているところに特徴が見られる。



作品2



作品3



作品4

②作品3について

作品1と同様、太陽の表現に子どもたちは着目し、「太陽が低い位置にあって普通と違う」「太陽が色々なものを支えている (c)」と、その存在から意味を解釈しようとしている。また、太陽、山、木、動物の表現から「自然があふれている (c)」「動物や植物が共存している (c)」「一つになっている感じ (c)」と、豊かな自然の表現を根拠に状況としてイメージを捉えている。さらに、その表現から「(自然に) 囲まれた安心感 (b)」としてイメージが捉えられている。

③作品4について

沢山の花や面が緑に塗られていることから「自然がいっぱい感じる、お花がたくさんではなやか」等、自然の豊かさがイメージと結びつき、さらに、「とても自然豊かでほっとする」「花が沢山あってやさしい感じ」等、へと感じ方をつなげている。また、「太陽の真ん中が赤くてとても暑そうな感じ」「にぎやかな感じ」「自然とめぐりあって大切な気持ち」に見られるように豊かな自然描写が自然に対する気持ちや状況を意味付けしている。さらに、「太陽の光を受けて植物がのびのび成長している感じ」「太陽とピンクのお花が結婚して真ん中の花ができたみたい」と、生命力や生命の誕生の状況をイメージする感じ方が見られる。

④作品5について

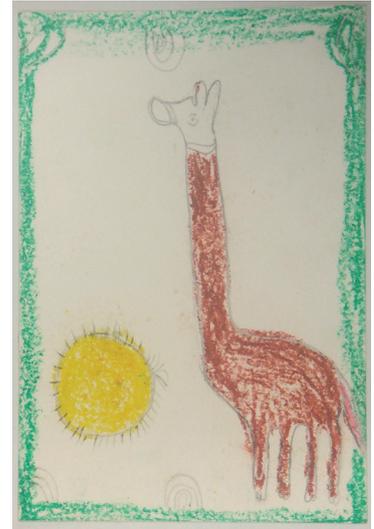
ドットで渦巻き状に花がかかっている造形要素から、「お花たちが歩いているようにも見える」「一つずつが動きそうな感じ」と動いている感じや、「色々な所とつながっているということの意味している」「みんなが手をつなごうとしている」「たくさんのお花とつながっていた」「花の会話をあらわしている」「点は足あとでみんなの花をつないでいる」「いろいろな人たちのつながりかもしれません」と、つながりによってイメージを意味づけているところに特徴が見られる。



作品5



作品6



作品7

⑤作品6について

造形の特徴は二つの太陽と黒の表現である。日本の子どもたちには見られない黒の表現について、「新しい扉への入り口、開ける勇気があるのかどうか試されているみたい」「別の世界になる感じ」「黒いところは影でいいことも悪いこともある」「昼と夜の組み合わせ」「ひかりと闇」と、現実と新たな世界、善と悪、昼と夜、光と影といった対となる概念や異なる場所が1つの世界に表現されていることをイメージとして捉えている。

⑥作品7について

日本にはいない動物が描かれていることや、動物より太陽が下に描かれているという位置関係に着目し、日本の自然環境やその表現との違いに気づいている。空は青色と黒色で描かれ、額縁の中にある世界のように表現されている。「一つの作品を描いたよう」に自然の事物そのものとおして生命のイメージが表されている。このようなa類の表現はアフリカの作品では日本に比べ少ないが、描かれている具体的な自然の事物やその環境そのものに違いが見られる。

⑦作品8について

特徴は緑と赤で根から木全体が描かれていることと、根が張って土の中に広がるように描いている。その要素から、全体がつながっているイメージを捉えられている。さらに太陽との関係に着目すると「たいようの光とまざって、緑に、赤が加わった」「陽のおかげでドッシリと木がしっかり育まれているよう」と、太陽の存在感や太陽と木の関係が捉えられている。さらに、「くらいけど自分でささえてる」「土の力を木が吸収している」と生命力への感じ方が示されている。

3. 全体の考察

まず、多様な色彩表現から日本とはちがう感じ方を子どもたちは見つけ出している。特に、作品2や作品3, 4, 6, 8



作品8

では、色が固有色や視覚的な概念にとらわれない色で表現されていることに違いを見つけ、豊かさや鮮やかさ、優しさやにぎやかさを造形から意味づけている。

さらに、描かれているモチーフや線や形に着目してみると、子どもたちはその違いから解釈を深めている。作品7は、自然の事物そのものとおして生命のイメージを表現している作品であるが、描かれている具体的な自然の事物やその環境そのものに違いが見られる。アフリカの作品は、日本と異なり抽象的、幾何学的な図形や文様で表す作品は皆無であり、すべての作品が自然の事物をとおしてイメージを表現している。しかし、作品7のように、写實的、視覚的に生命のイメージを表現している作品（a群）は日本に比べ少なく、「日本にはない花の色」「見た色と違う色」「見える色ではなく感じた色」と日本の子どもたちの記述に見られるように、固定概念に縛られない色での表現や写實的、視覚的な色彩に支配さ

れない色使いに日本の子どもたちは違いを見つけている。

モチーフにおいて特に特徴的なものが太陽である。アフリカの表現は日本に比べ太陽の存在が大きい。太陽そのものを生命の象徴として表現されることにより、優しさや明るさといった感情や気持ち（b群）、力強さ等の生命力への共感（d群）を見る側にあたえている。さらにその表現は、眩しさや明るさといった状況や、包み込む、支えるといった関係性（c群）から生命のイメージが捉えられている。

アフリカの表現内容において特に着目したいのは「状況や関係」（c群）の表現である。作品7を除くすべての作品について日本の子どもたちは「つながり、支える、つつむ」といったイメージを、自然物相互や自然と人間相互の関係において言語化している。先の研究や本対象児が事前に描いた日本の表現においても一部でその内容は見られたが、アフリカの作品の鑑賞活動の過程において、多くの子どもがその視点からイメージを意味づけているところに特徴が見られる。また、作品6に見られた、現実/新たな世界、善/悪、昼/夜、光/影といった対の概念において生命を解釈しようとする見方は、日本の子どもたちの作品の中にも稀に生/死、喜び/悲しみ等の表現において確認されているが、本事例の鑑賞活動においては、その見方が多くの子どもたちにおいて言語化されている。また、日本の子どもたちの表現では、「生命力への共感」（d群）を表す作品は少なかったが、作品1, 4, 8の解釈に見られるように、そのイメージは鑑賞活動において深まっている。

4. おわりに

表2は授業後の感想の記述の特徴的な内容を整理したものである。相違点として色彩の豊かさや色使い、ものの捉え方、見方、描き方の違いに気づきながら、共通点として、考えていること、伝えたいことは同じであると子どもたちは捉えている。環境や経験、文化的背景から表現の違いを感じながら、「生命（いのち）」への見方や感じ方、考え方に共通点があることを子どもたちは見つけ出し、自分の「生命（いのち）のイメージ」を深めていることが期待できる。「生命（いのち）のイメージ」をとおりアート・メディエーションによって自然観を知として構築させるその実践の意味付けとプロセスの分析については、今後の検討としたい。

付 記

本実践は、科研費・基盤研究(C)「自然観を構築させる芸術の6層の検証—言語/造形によるメディエーション—」(19K02740)の助成において行った。尚、本実践において協力いただいたLusanga Primary Schoolの教員皆様及び児童皆様、Radiant Universal Study Centre Primary Schoolの教員皆様

表2 授業後の感想

<p>〈相違点〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・見えるけれど違うものを見ていたのかと思うくらい表現が違った。 ・色がカラフルで、物のとらえ、描き方が違っておもしろかった。見えた色だけでなく感じた色で表していたからよかった。 ・ものの見え方がちがって色や大きさや形、今までの経験での見方があると思った。 ・それぞれ見るもの、見えるもの、見方などが違っていてすごく楽しくなってとてもうれしく感じた。 ・命は形だと思ったけど、木や植物、動物で表していて、私とは見え方が全然ちがって、おもしろかった。 <p>〈共通点〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・考えていた物、動物、花が生まれて、それぞれ人は物の見方がさまざま。発想ははばられていないけど表そうとしているところは同じ。 ・自分たちと同じことを伝えたいということが伝わった。 ・それぞれ感じるものがちがう。でも、同じものを見ているということが分かった。 ・国がちがうと、表し方や描き方が違うけれど、どのようなことを伝えたいかは同じだと思った。 ・違う国でも考えていることは一緒だと思った。
--

及び児童皆様、椋山女学園大学附属小学校5年生担当教員皆様、授業者のイミック新子先生、及び児童の皆様に、深く感謝申し上げます。

注

- 1) 磯部錦司：『芸術の6層による教育—自然観を軸とした知の構造—』、ななみ書房、2020、pp. 64-189.
- 2) 磯部錦司・イミック・アレクサンダー・笹瀬綾香：「自然観を視点とした〈言語/造形〉によるアート・メディエーション—事例：アフリカ（タンザニア）—」、椋山女学園大学教育学部紀要、Vol. 14、2021、pp. 257-264.
- 3) 磯部錦司：「現代日本の生命論を軸とした美術教育の展開—自然観を構築させる6段階と文化的領域—」、(科研・基盤(C)、2013～2015)。
- 4) 増井透・磯部錦司：「子どもの描く絵における色彩情報の分析—「命」をテーマにした国際比較—」、人間関係学研究、第17号（椋山女学園大学人間関係学部・大学院人間関係学研究科）、2019、pp. 79-85。増井透・磯部錦司：「幼児の絵の色彩分析—「いのちのイメージ」を描いた絵の国際比較—」、人間関係学研究、第19号（椋山女学園大学人間関係学部・大学院人間関係学研究科）、2021、pp. 113-120.
- 5) Lusanga Primary School
- 6) Radiant Universal Study Centre Primary School
- 7) イミック新子 椋山女学園大学附属小学校教員
- 8) 前掲書1), pp. 297-301.